

〈 2. 特集 行く・読む／会う・話す 〉

生きるための「ひきこもり支援」

——とある支援機関の記録——

荻野達史『ひきこもり もう一度、人を好きになる』

—— 仙台「わたげ」、遊びとかかわりのエスノグラフィー 』（明石書店、2013 年）

伊藤 康貴

本書は、「ひきこもり支援」を行っている NPO 法人わたげの会と社会福祉法人わたげ福祉会(以下、合わせて「わたげ」とする)を中心とした支援活動を、著者が 10 年以上かけてフィールドワークした力作である。「ひきこもり」というものが社会問題として扱われはじめたのは 1990 年代に入ってからであるが、それから 20 年近く経った現在、全国各地ではさまざまなかたちで「ひきこもり支援」が展開されている。本書で取り上げられている「わたげ」もそのひとつであり、仙台において 15 年以上前から支援活動を行っている、いわば老舗である。本書はその「わたげ」を中心に展開されている支援活動を、その内側から豊かに描き出そうとする試みであり、著者は「わたげ」の中心人物やスタッフ、引きこもった経験のある利用者（メンバー）やその家族、さらには「わたげ」周辺で支援活動を支える人々の語りや思いを、フィールドで得た実感をもとにして丹念に解釈し記述してゆく。

本書でもっとも特徴的なのは、おそらく本書の記述スタイルであろう。副題にもあるとおり、本書はひとつのエスノグラフィー作品である。「わたげ」の独特の「雰囲気」は、支援をする空間においては決定的であると著者は述べるが、その独特の「雰囲気」を読者に伝えるには、「わたげ」の支援実践を科学的で客観的に紹介する記述スタイルよりも、著者がフィールドでつかった感触を前面に押し出した主観的な記述スタイルが適しているという著者の判断によって、本書では著者を通した「わたげ」の現実が再構成されているわけである。確かに、「わたげ」の現実を内側から体感するには、読者としてはその方が読みやすいし分かりやすいと思われる。もちろん、フィールドワークにおいて著者が「わたげ」のメンバーらと寮で一緒に暮らしたり、ボランティア活動と一緒にしたりするなかで、現場のメンバーに対して著者が思うこと、例えば生真面目である印象を受ける青年たちが、ときに「ずるい」と感じられたり、あるいはずいぶんと「ちゃっかり」していると思うとき（本書: 200）、そのように感じるのは著者自身の感性ゆえであり、だれもがそのように感じるという保証はない。ただ、あえて著者の感性を通した表現をすることによって、読者もその場で人びとをどのように感じることが可能であるのかを読み取ることはできるし、むしろどのように感じることが可能であるのかを表現することで、その記述のリアルさが保証されるものと思われる。それに、せつかく 10 年以上も現場を見てきたのだから、その現場において身に着けてきた著者自身の感性それ自体が社会的に考えられてもいいくらいであろう。著者は調査者としてフィールドに入っているつもりだったとしても「わたげ」で感じる「雰囲気」や人びとから伝わってくる「思い」は著者自身の「感じかた」や「こだわりかた」といった感性に根ざしたものであり、結局は著者自身もフィールドの一部となっているはずだからである。

ちなみに、「わたげ」の支援活動は、フリースペースなどの「居場所」活動や学習支援、就労支援、家族支援、精神医療や福祉制度との連携など、多岐にわたる。フリースペースではメンバー同士で他愛もないやり取りが繰り返されている反面、学習支援や就労支援ではスモールステップ的に課題や問題が明確に設定されており、やはりそれぞれの支援には特有の意味があることが、メンバーやスタッフの語りから明らかになる。もちろんひきこもっている本人だけでなくその家族も、「わたげ」にかかわることを通じて自らの親子関係を問い直していく。また発達障害や精神障害といった専門性を必要とすることにかんしては当然ながら医療機関との連携を必要とするし、「わたげ」の作業所や自立支援施設などを精神保健福祉の制度上の枠組みで運用する際にも精神科医らの専門機関との連携は欠かせない。そして、このような「わたげ」の多岐にわたる支援活動において通底しているのは、本書でもキーワードとなっている〈あそび〉と〈かかわり〉であり、このキーワードの連鎖反応が、「わたげ」の支援活動をかたちづくっていると言える。

引きこもっていた人は、しばしば自身の状況を「どうにかしたい」「どうにかしなければ」と焦り頑張るために、気持ちに余裕のない、いわば「遊び」や「ズレ」のない状態に置かれる。しかし「わたげ」に来るメンバーやスタッフらといった「友だち」や「仲間」と「かかわり」、かれらとの「遊び」を通して自分のやっていること、やっていきたいことを「面白く」「楽しむ」ようになること、それが「わたげ」の支援で最も意識されていることであり、その支援には、単なるトレーニングにとどまらない、〈生きていくことへの欲〉の涵養といった「生への志向」が含意されているのである。スタッフの一人が「働いて食べて寝て、っていう単調な生活で、一人でいたら、僕だったら気が狂っちゃうんじゃないかと思うんですね」と述べるように（本書：264）、「わたげ」の支援の中核には、人とかかわる生の在り方を知って欲しい、その楽しみを知らないのはもったいないという思いがある。無論、そもそも人とかかわることが苦痛であることもあり、そもそもそのような苦痛がひきこもった要因として語られたりもする。だれとでも仲良くなれるわけではないし、かかわりあいのなかで嫌な思いをすることもある。引きこもっていたメンバーにとって人とかかわることのネガティブな側面は骨身にしみているわけで、にもかかわらず人とのかかわりを持つことに重きを置いた支援をするというのは、結局は「余計なお節介」であるのも事実だろう。しかしたとえ「余計なお節介」であったとしても、それでも支援をするというのは、やはりそれだけの信念を必要とするし、秋田さんら「わたげ」のスタッフらはそのような信念をちゃんと持っていると感じた。「生きていてほしい」、「楽しみを知らないのはもったいない」、そんな思いが伝わってくる。そしてそのような信念が「わたげ」の「過剰」で「贅沢」な支援活動を可能としているのだ。